



DORESDEN DOLLS

BY
MASAKO KARASAWA

PHOTOGRAPHY
BY
C. TAYLOR CROTHERS

さあ、これから始まるのは、何とも残酷でエロティックな物語。

アメリカのボストンで生まれた、この妖しげな二人組は、

鍵盤とドラムを叩きつけ、世にも奇妙な世界を奏で始める。

ザ・ドレスデン・ドールズの最新作「イエス、ヴァージニア」は

三文喜劇を見るようないかがわしさとユーモアと、

逞しい歌声、華麗なメロディとが舞う、21世紀ロック・オペラだ。

1930年代のフレンチ・キャバレーや欧州音楽をエッセンスに、

空想と現実と、時間軸もがぐにやりと曲がる独特の音世界。

はてさて、このゴスいコスチュームも含めて、この二人組は、

悪趣味な歌舞伎者か、前衛アートの新鋭か？ まずはご賞味あれ

果 たして、彼らドレスデン・ドールズをどんな風

に楽しむべきか。ほぼマリリン・マンソン一歩手前、コス色豊かなそのルックスが、あまりに昨今のインディ・ロック風情とかけ離れているからと言って、彼らの最新作「イエス、ヴァージニア」を食わず嫌いのあまりに勿体なさすぎる。ギターとドラムの最小限のコンビネーションにして男女二人組という形態から、ホワイト・ストライプスの二番煎じだろうと推測するのでも、あまりに単純で早計だ。

「三文オペラ」で有名な作曲家クルト・ヴァイルと、ザ・フーのロック・オペラ「トミー」を自らのルーツに挙げた歌姫アマダ・パーマーと、まるで従僕のようにその才能に憧れ込み続けるピエロ男、ブライアン・ヴィグリオーネ。彼らが出会ったのが2001年のハロウィンの日だった、という逸話はあまりに出来すぎのような気もしくもないが、実際、その日から彼らが奏で続けているのは、まるで月明かりに照らされた妖しい夜に繰り広げられる、いかがわしく美しい2000年代歌劇。例えば想像してみれば、1930年代のあるヨーロッパの下町。でこぼこ歩きにくい石畳の、薄暗い裏路地はひっそりと静まりかえっている。が、その先に明かりの流れる店が一軒だけ、薄汚いドアを開けると、そこは1日の仕事を終えた男達の笑い声、酒の匂いが混じったむんとした空気。給仕の女達のはだけた肩と、わざとらしく翳るスカートの裾。騒々しくいかがわしい夜、店の一番奥にあるピアノの前で、アマダ・パーマーは時に滑稽に、まるで大きくなりすぎた子供達に言い聞かせるように、寓話めいた曲の数々を歌う。そう、まるで下町の三文喜劇に迷い込んでしまったかのような、とても不思議で独特の小世界が、プレイボタンを押した瞬間に見事に浮かび上がってくる。これは、かなり面白い。

リアリティTVの例を挙げてもなく、ここ数年の間に珍重されてきた「リアルであること」「素のままであること」は、いつの間にか取ってつけたような誠実さの言い訳となり、また、安物のコメディのような人の滑稽さを表すに過ぎなくなってしまった。もちろん、嘘偽りのない言葉、音楽はいつの時代も人の心を強く打つものであり、素晴らしい力強さを持つ。でも、それだけで楽しいか？ それだけで十分？ 音楽とは、芸術とはもっと楽しく自由なものではないか、美しさも、韻さも、

感度も喜劇も、現実では体験出来ないはずの、魅惑の世界が無限に広がる、その興奮こそが、私達が音楽に惹き付けられて止まない理由だったはずだ。ドレスデン・ドールズの二人は、妖しげな笑顔を浮かべながら、その魅惑の世界においてと手招きする。アルバムから聞こえる声そのままに、かなり逞しい体つきと横顔の持ち主アマダと、実は横柄からのアメリカン・ハードロック小僧だったというブライアン、二人と初対面した。話、面白いです。

●最初にバンドとしてのアイデアを持っていたのは、アマダだったんですね？ バンドとしてのスタイルって、当初はどんなものをイメージしてたんでしょう？
アマダ・パーマー (以下、アマダ) 「私って12とか13の頃に曲を書き始めたのね。で、大学を卒業する頃になって、真剣に音楽で食っていくって決心して、それまではずっとピアノと歌とで演奏してただけど、同じ曲を演奏するにも、より強烈なインパクトをオーディエンスに与えるには、バンドの方がいいだろうって直感的に感じてた。同じ歌詞、同じリズムでもあって、やっぱり全然違うものなのよ。ドラムが大きい音を出せるとか、ロックっぽくなるって言うだけじゃなくて、観客を惹き付けるっていう面において、バンドってすごく有効なの。で、彼に会う1年前からずっとドラムを探し続けて、2、3人とは実際一緒にやってみただけど、彼らはブライアンとは正反対だった。彼らは正確なビッチをキープ出来るんだけど、それだけ。要は人間ドラママシンなのよ (笑)。私自身、彼らと一緒にやってみても、何が決定的に欠けていたかはわかったんだけど、果たしてそれが何なのかはわからなかった。でも、ブライアンと出会って「あ、そうか、私に必要なのはミュージシャンだったんだ」って気付いたのよ。私と一緒に演奏してくれる人が必要なんだ、って」

ブライアン・ヴィグリオーネ (以下、ブライアン) 「でも、僕にとっても、彼女の曲作りのスタイルに出会えたのは、本当に幸運だったと思うんだ。本当に様々な音楽的アイデア、サウンドのダイナミクスに挑戦することが出来るからね。実際のパフォーマンスでも、曲の個性を引き出すことが出来る。もっと具体的に言えば、僕はアマダの演奏、指の動きを見ることで出来ることもあるんだ。

「ステージ衣装を脱いで普段着で舞台に立つこと=オーセンティックなパフォーマンス」という図式は、あくまでも最近の流れだし、新しいコンセプトなのよ。でも、コスチュームやメイクを否定するのって、シアターや演劇をフェイクだって言うようなものでしょ？ 「私達はオーディエンスと何も変わらない、ただ演奏してるだけ」みたいな新しいロックのフィロソフィの方が、私には、嘘っぽく思えるのよね

それって例えば、彼女が僕に背を向けているギタリストだったら、まったく想像も出来ないことだろう？
アマダ 「まあ、私のソングライティングって、かなりとちからかっているのよ (笑)。でも彼は、その曲で何をやりたいのか、どんなスタイルに向かっているのを感じ取って、フィニッシュ・ラインまで持っていてくれる。ジャズのテイストが入った曲だったら、彼のドラムが加わることによって、立派なジャズに仕上がっていく。バンドでもロックでもそう。ピアノだけだと、ジャンルまではそうそうコントロール出来るものじゃないのよ。ベースの代わりは出来るんだけど、音響やダイナミクスにおいては、ドラムってその数十倍も効果的だし、曲そのものに強烈なフレーヴァーを与えてくれるから」

●あなた達がやっているスタイルは、前にやっていた人っていますか？ 私は思い浮かばないんだけど。
アマダ 「そうね……確かに、考えてみればあんまりないのかも (笑)。フィオナ・アップルとか、トリー・エモスもピアノ中心だけど、ドラムに限るものではないし。ピリー・ジョエルやエルトン・ジョンも、いろいろと付け足したりしてるしね。まあ、一つ例があるとしたら、初期のクルト・ヴァイルとか。彼がプレヒトとやった「三文オペラ」は、ピアノとドラムだけっていう構成が多かったから。だから、ロック・バンドでは思い付かないわね。うん、いい質問だね (笑)」

ブライアン 「もう一つ言えるのが、コンテンポラリー・ミュージックにおいてピアノが使われていた時って、そもそも音を添える存在に過ぎなかったんだよね。決して、その楽曲の中心になるものではなかったんだ。それが、エルトン・ジョンやピリー・ジョエルみたいな、メインの楽器として使われるようになって。ピアノだけのもの、もしくはピアノとリズム・セクションっていう発想は、その流れからという自然なことだと思うんだ。まあ、有名どころはないかもしれないけど、この構成で活動してるアーティストは、決して少なくないと思う」

●じゃあ、歌詞についても同様に訊いていいかな。そもそもあなた達としては、自己表現としての歌詞や言葉ではなく、様々な意味やストーリーを含んだ寓話的なものを書いてみよう、という志はあったんですか？
アマダ 「いいえ、やっぱり最初は前者の方よね。特に十代の頃なんかは、暗くて、告白的な歌詞ばかり書いてたわ。まあ、実際、暗くて落ち込みがちな子だったから (笑)。そこから徐々に、ストーリーを持つものにギア・チェンジしていったって感じかな。今でも、その両者は不思議なバランスでミックスされてると思う。特にこの新作ではね。昔って、歌詞はそのどっちかであるべきだと思ってたのよ。自己表現する、告白的な場合には、ビュアでありのままを書かなくちゃいけないと思ってた。そこに架空のストーリーを混ぜ合わせることに、少なからず後ろめたさがあったのね。でも、本当は、その両方を混ぜ合わせる方が、ずっと面白い作品になるの

よ。すごく不思議なのは、大抵の場合、ソングライターは「内面を告白する」か「フィクション」かの、どちらかのスタイルだと決めつけられがちなこと。で、同時に、そのほとんどが自分の体験を書いたんだろう、と思われるのよ。でも、例えば私が脚本家だったり、小説家だったりしたら話は違ってくる。でしょ？ 演劇の脚本っていうのは、当然、自分自身の体験と想像とが絡み合っていて、一つの作品になっていくわけで。でも、それを観る観客は、「この場面は脚本家の実体験なんだわ」とか「これは架空の物語ね」なんて考えない。その違いって、すごく妙なことではあると思うのよね」

●ああ、確かに。そう考えた時、あなた達二人が、自分のイメージや、楽曲のスタイル、その歌詞の世界——いずれにおいても、どこか舞台劇的というか、歌舞している感じっていうのは、納得すると思うか。
アマダ 「これもやっぱり、受け手の見る目が変わってきた、っていうことなんじゃないかしら。だって、エンターティナーというのは、伝統的に、みんな衣装を着てきたわけだから。そういうステージ衣装を脱いで、普段着で舞台に立つこと、イコール、オーセンティックなパフォーマンス、っていう図式って、あくまでも最近の流れだし、新しいコンセプトなのよね」

●うん、すごく90年代的でもあるし。
アマダ 「そうなのよ。だって、コスチュームやメイクを否定するのって、シアターや演劇をフェイクだって言ってるようなものじゃない？ 衣装やメイクって、ある意味、観望したいものなのよ。時にはより深いエモーションな琴線に触れる手助けをしてくれる。そして、オーディエンスに提供したいものを、より強調させてくれるの。もちろん、そこでは必然的にオーディエンスとの距離が生まれてしまうけど、その距離っていうのは、すでに前提っていうか、暗黙の了解よ。[はい、ここからはこの空間に集中する時間ですよ] って合図にもなる。正直、私には、ロックの新しいフィロソフィである、「僕らは君達オーディエンスと何も変わらないんだよ、ただ演奏してるだけさ」って方が嘘っぽく感じる。だって、ステージに立つことと、その受け手であることは、明らかに違うもの。ブライアン、あなたはどう思う？」

ブライアン 「……ああ、ごめん！ この表紙 (本誌前号) が気になって (笑)」
アマダ 「あはは！ アークティック・モンキーズね。でもほら、これもいい例。彼らがこの写真で着てるものだって、コスチュームと言えどコスチュームなのよ。それに、みんな同じ髪型だし (笑)。そう言えば、一つ、可笑しかったことがあるの。ナイン・インチ・ネイルズとツアーをした時、彼らって全員が決まって黒のジーンズに黒のTシャツを着てるのよ。ステージに立つ時も同じなんだけど、ちゃんとステージ用の黒ジーンズと黒Tシャツが存在するのよ (笑)。彼らにもステージ衣装ってものがあるんだな、って。破けた感じとか、裾のほつ

れとかもちゃんとイメージ通りなんでしょね (笑)。ね、それと私達の違っていて、ほとんどないのよ」
●例えば、「トミー」でビート・タウンゼントが試みたことと、自分達の活動とに何か共通点を見つけることって出来ると思います？
アマダ 「ああ、私にとって「トミー」は本当に大好きな作品なのよ！ もちろん、共通点はあるでしょうね。ザ・フーと私達とでは音楽のスタイルは違うけど、発想そのものはすごく近いんじゃないかしら。特に、あのアルバムにおいてはね。物語を創造するという点だけじゃなくて、メッセージが私達のそれと同じだと思うの。つまり、剥き出しの感情だったって、自分への正直さだった。あと、(ピンク・フロイドの)「ザ・ウォール」も。高校生の頃、すごく衝撃を受けたわね。ここで強調しておきたいのは、私は、若いソングライターとして当時から、音楽とヴィジュアルを分けて考えてなかったっていうこと。実際、私もMTVが流行り出した時代の、最初の世代でもあるから。新しい音楽であればあるほど、それはヴィジュアルと一緒に知覚していくんだと思う。単に音楽っていうだけじゃなくて。でも、そういう感覚って、実際には新しいことでも何でもないのよ。音楽のルーツを遡っていけば、決して音楽とそのサウンドだけを指すものではないから。でしょ？ いろいろなサウンドを皆で奏でることが大切だったって、宗教や儀式の場で必要なものであったり、純粋に「聴く」ものとしての音楽っていうのは、むしろすごく新しい考え方なのよ。だって、元来は宗教においても、演劇においても、とても社交的で、感情を表す表現方法だったわけだから」

●あー、なるほどな。すごく面白いな。じゃあ、あなた達はエンターテイメントにおける非日常性、特別な空間をオーディエンスに提供することと重要性に気付いたのは、いつ頃のことなんだろう？
アマダ 「いいえ、私からすると、逃避とすら思っていないと思う (笑)。私達がキックスやマリリン・マンソンとどう違うのかと言え—例えば、自分達のメイクが汗で落ちてきたとしても、それを全部見せるものとしてライブを続けていく。焦ってメイクを直しに行ったりはしない (笑)。実際、メイクが落ちたりするって、私、好きなのよ。幻想を作っておいて、それを取って自分から壊して、っていうか。「私達って生身の人間なんだもの、メイクも落ちるし、衣装だって破けるわよ」っていう、当たり前のステートメントでもわけじゃない？ 私達のファンは、そういう部分もちゃんとわかってくれてると思う。そこが彼らのグレートなところっていうか。ライブに足を運んで、非日常的な空間に逃避しつつ、リアル・ライフにおいても自分を解放する。自己表現することに対して勇気を受け取ってくれる。それって、何も奇抜な衣装に身を包んで、髪の毛を紫色に染めることじゃないのよ。自由に表現出来ること、視野を広げるってことなの」